第五冊のはじめに

『文選（もんぜん）詩篇』第五冊には、巻二八と巻二九、部立てでは「楽府（がふ）」の後半、「挽歌（ばんか）」、「雑歌（ざっか）」、そして「雑詩（ざっし）」の前半が収められています。

「楽府」はもともと民間でうたわれていた歌謡だったのですが、文人もそれに倣って作り始めました。中国古典文学には時に知識階級の人びとが庶民の文芸を取り込むことがあります。楽府もそうして詩の一部となったものです。

「楽府 下」ははじめに六朝を代表する文学者陸機（りくき）の楽府が十七首ならべられ、以下すべて文人の楽府が収められています。文人の楽府には、本来の楽府のかたちをなぞった、いわば模擬的な作品から、固有の作者の姿が揺曳（ようえい）するものまで幅があります。一般の詩との差異を求めれば、楽府はたとえ作者の個々の状況や心情が映されるにせよ、話者はあくまで楽府の歌い手としての立場からうたっていることが挙げられます。そもそも一般の詩であっても、作者と話者（詩のなかにおける発話者）

とは短絡すべきでないでしょうが、楽府の場合はその区別は歴然としています。言い換えれば、詩人は楽府作品のなかで楽府の歌い手という役割を演じていることになります。楽府における作者と話者の間の隔たりは、「あそび」の空間を生み出します。このことも文学がそもそも「あそび」を含むものであることを示しています。文学作品をすべて作者自身ののっぴきならぬ表白だととらえてしまうのは、偏狭にすぎるでしょう。

「挽歌」も本来は民間でうたわれた「薤露」「蒿里」（『文選』には未収録）という、人の死を悼む歌から生まれたものです。歌のなかでも葬送に関わる作です。

「雑歌」のはじめには秦の始皇帝暗殺を果たせずに殺された荊軻、宿敵項羽らを打ち破って漢王朝を立ち上げた漢の高祖劉邦、秦漢の交に位置する二人の作がならびます。『文選』には採られていませんが、『史記』に見えてよく知られる「垓下の歌」も、項羽が劉邦の軍に追い詰められ最期を前にした歌です。そうしてみると、どうやらこの時期の歌は、劇のなかの最も盛り上がった場面で主人公がうたった歌と考えるのが自然でしょう。とすると、荊軻とか劉邦とかは作者ではなく、主人公

というべきです。そもそも前漢には、意外なことですが、実は詩はのこっていないのです。前漢の時期には、散文と詩の中間に位置する「賦」というジャンルが文学の中心だったのです。

巻二七四の「郊廟（こうびょう）」「楽府 上」から始まった「歌」は、本冊巻二八の「楽府 下」「挽歌」「雑歌」で終わり、再び狭義の「詩」にもどって、巻二九の「雑詩 上」は「古詩十九首」（一九六頁）から始まります。作者未詳の「古詩十九首」は、五言の楽府詩と建安（けんあん）詩を結ぶものとして、はなはだ重要な作品群です。そこに流れている抒情は人生のはかなさから生じる悲しみと満たされない恋の悲しみ、その二つにまとめられます。人生の無常と恋の悲哀というと、まるで日本の文学のようですが、中国の詩でもその後も流れ続けるものではあります。それは日本や中国に限らず、どの国の抒情詩においても見られるものでしょう。ただ中国の士大夫の文学はそうした感傷に浸ることなく、悲しみを乗り越え、人間の力を肯定し、生きる意欲をうたおうとする、そこに中国古典詩の特質があるように思われます。そうして登場したのが建安の文学であり、建安文学こそ中国の詩の始まりといってよいものです。

「雑詩」は「古詩十九首」、前漢の李陵（りりょう）、蘇武（そぶ）、後漢の張衡（ちょうこう）、そして以下に建安詩人の作が続きます。まず作者未詳の詩を置いて、以下は作者の時代順にならべられていますが、李陵・蘇武の詩を編者が前漢の人の作と理解していたとは限りません。李陵、蘇武に仮託された作であろうと、とりあえずはここに収めておくということだったでしょうか。これまでの詩の分類に収めきれない作が「雑詩」としてまとめられているのですが、そこには時の経過に対する感慨、友への思い、異性への思いなど、多様なテーマが含まれています。決して雑然とした集まりではなく、それぞれに主題をもった重い作品が収められています。

凡　例

一、本書は梁・昭明太子編『文選』、その「詩篇」の部（巻一九―巻三一）に収められた全作品の原文・訓読・訳・語注である（全六冊）。各詩篇の末尾には補釈を付して理解の補いとした。

二、本書の底本には、通行するいわゆる胡刻本（ここくぼん）を用いた。唐・李善の注を付した『文選』を、胡克家（ここくか）が清の嘉慶（かけい）十四年（一八〇九）に刊行した本である。

三、本文は一部改めた箇所がある。「胡氏考異」（胡刻本付載）に従った場合は特に注記せず、集注本、九条本など他の諸本によって改めた場合のみ、その旨を記した（『文選』の諸本および注釈については、第一冊末の「文献解説」を参照）。

四、原文は正字を用い、底本が異体字の場合は正字に改めた。訓読以下は通行の字体を用いた。ただし、固有名詞の「堯」など、あえて正字を用いた場合もある。

五、連作の詩で底本の詩題に「〇〇首」とあるものは、それぞれの詩に「其の一」

「其の二」と記した。底本にその記載がなく、李善の注が「其一」「其二」と分けている詩には、「(一)」「(二)」と記した。

六、語注などに『文選』所収の作品を引用する場合は、『文選』の巻数・作者・題名を記した。本文庫に収録された作品には、さらに分冊数を□□のように示した。

七、詩人については、各冊の初出に作者小伝を設け、簡単に紹介した。

八、語注の末尾に各詩篇の押韻を記した。韻字の読みは漢音による。換韻する箇所は「／」で示した。

九、付録として、各巻の末尾にコラムを載せた。また、「はじめに」・系図／地図を全冊に、文献解説・解説を第一冊に、年表・索引を第六冊に掲載した(文献解説・索引は富永、系図／地図は緑川、年表は釜谷、「はじめに」・解説は川合による)。

十、各冊のカバー・巻扉の図版は、宇佐美文理氏の選定による。

目　次

第五冊のはじめに
凡　例

巻二八　楽府 下、挽歌、雑歌

楽府下……二〇
樂府十七首（楽府十七首）……晋・陸機……二〇
猛虎行（猛虎行）……二〇
君子行（君子行）……二五
從軍行（從軍行）……三

豫章行（予章行）……三五
苦寒行（苦寒行）……三九
飲馬長城窟行（飲馬長城窟行）……四三
門有車馬客行（門有車馬客行）……四七
君子有所思行（君子有所思行）……五一
齊謳行（斉謳行）……五六
長安有狹邪行（長安有狹邪行）……六一
長歌行（長歌行）……六六
悲哉行（悲哉行）……七〇
吳趨行（呉趨行）……七四
短歌行（短歌行）……八〇
日出東南隅行　或曰羅敷豔歌（日出東南隅行　或いは曰う　羅敷艶歌）……八四
前緩聲歌（前緩声歌）……九二
塘上行（塘上行）……九七

樂府一首（楽府一首）……南朝宋・謝霊運…一〇一
會吟行（会吟行）……一〇一
樂府八首（楽府八首）……南朝宋・鮑照…一〇九
東武吟（東武吟）……一〇九
出自薊北門行（出自薊北門行）……一一五
結客少年場行（結客少年場行）……一一〇
東門行（東門行）……一一四
苦熱行（苦熱行）……一一八
白頭吟（白頭吟）……一一三
放歌行（放歌行）……一一八
升天行（升天行）……一一三
鼓吹曲（鼓吹曲）……南斉・謝朓…一一四

挽歌……一五一
挽歌詩（挽歌詩）……魏・繆襲…一五二
挽歌詩三首（挽歌詩三首）……晋・陸機…一五五
挽歌詩（挽歌詩）……東晋・陶淵明…一六九
雑歌……一七三
歌一首并序（歌一首　并びに序）……先秦・荊軻…一七三
歌一首并序（歌一首　并びに序）……漢・高祖…一七六
扶風歌（扶風歌）……晋・劉琨…一七八
中山王孺子妾歌（中山王の孺子妾の歌）……南斉・陸厥…一八七
コラム　楽府　一九一

巻二九　雑詩　上

雑詩上

古詩十九首（古詩十九首）……一九六
与蘇武三首（蘇武に与う三首）……漢・李陵…二五一
詩四首（詩四首）……漢・蘇武…二五八
四愁詩四首幷序（四愁の詩四首　幷びに序）……後漢・張衡…二七一
一思曰（一の思いに曰く）……二七四
二思曰（二の思いに曰く）……二七六
三思曰（三の思いに曰く）……二七八
四思曰（四の思いに曰く）……二七九
雑詩（雑詩）……魏・王粲…二八一
雑詩（雑詩）……魏・劉楨…二八五
雑詩二首（雑詩二首）……魏・文帝（曹丕）…二八八
朔風詩（朔風の詩）……魏・曹植…二九五

雑詩六首（雑詩六首）……曹植…二〇三
情詩（情詩）……曹植…二二六
雑詩（雑詩）……魏・嵇康…二二九
雑詩（雑詩）……晋・傅玄…二三三
雑詩（雑詩）……晋・張華…二三八
情詩二首（情詩二首）……張華…二三二
園葵詩（園葵の詩）……晋・陸機…二三六
思友人詩（友人を思う詩）……晋・曹攄…二四〇
感舊詩（感旧の詩）……曹攄…二四五
雑詩（雑詩）……晋・何劭…二四九
雑詩（雑詩）……晋・王讚…二五二
雑詩（雑詩）……晋・棗拠…二五五
雑詩（雑詩）……晋・左思…二六一
雑詩（雑詩）……晋・張翰…二六四

雜詩十首（雜詩十首）……晋・張協…三六七
コラム　古詩十九首　四〇四
地　図　四〇八

全六冊の構成

第一冊　巻一九(補亡、述徳、勧励)、巻二〇(献詩、公讌、祖餞)、巻二一(詠史)

第二冊　巻二二(詠史(続)、百一、遊仙)、巻二三(招隠、反招隠、遊覧)、巻二三(詠懐、哀傷)

第三冊　巻二三(贈答　一)、巻二四(贈答　二)、巻二五(贈答　三)

第四冊　巻二五(贈答　三(続))、巻二六(贈答　四、行旅　上)、巻二七(行旅　下、軍戎、郊廟、楽府　上)

第五冊　巻二八(楽府　下、挽歌、雑歌)、巻二九(雑詩　上)

第六冊　巻三〇(雑詩　下、雑擬　上)、巻三一(雑擬　下)、文選序

文選

詩篇

(五)

巻二八　楽府 下、挽歌、雑歌

「蘇武牧羊図」民国・王震,
橋本コレクション

楽府下

陸機

楽府十七首

猛虎行

1 渴不飲盜泉水
2 熱不息惡木陰
3 惡木豈無枝
4 志士多苦心
5 整駕肅時命
6 杖策將遠尋
7 飢食猛虎窟
8 寒棲野雀林
9 日歸功未建
10 時往歲載陰

楽府十七首

猛虎行

渴するも盜泉の水を飲まず
熱するも惡木の陰に息わず
惡木　豈に枝無からんや
志士　苦心多し
駕を整えて時命を肅み
策を杖りて將に遠く尋ねんとす
飢えては猛虎の窟に食らい
寒くして野雀の林に棲る
日歸るも功未だ建たず
時往きて歲は載ち陰る

11 崇雲臨岸駭　崇雲　岸に臨みて駭き
12 鳴條隨風吟　鳴条　風に随いて吟ず
13 靜言幽谷底　静かに言う　幽谷の底
14 長嘯高山岑　長嘯す　高山の岑
15 急絃無懦響　急絃　懦響無く
16 亮節難爲音　亮節　音を為し難し
17 人生誠未易　人生　誠に未だ易からず
18 曷云開此衿　曷ぞ云に此の衿を開かん
19 眷我耿介懷　我が耿介の懐いを眷みて
20 俯仰愧古今　俯仰して古今に愧ず

楽府十七首

猛虎行

のどが渇いても盗泉の水は飲まない。暑くても悪木の影に休まない。
悪木に枝がないわけではないが、志高き者は辛苦をなめても不義を避ける。
馬車の支度を調えて君命をかしこみ、杖を手に遠い旅に向かう。

飢えれば猛虎の岩屋のなかで食らい、寒ければ雀の巣くう林のなかで宿る。
日は西の山に帰るのに、功績はまだ挙げられぬ。時は過ぎ、歳暮も近づく。
高い雲が岸を見下ろすかにもくもくと湧き起こり、木々の枝は風に吹かれてざわざわと音を立てる。
深い谷底で静かに思いをめぐらし、そびえる山の峰で声長く嘯く。
激しくかき鳴らす絃に弛んだ響きはなく、きっぱりした調子は並みの音をなさぬほどに強い。
人生はまことに容易ならぬもの。この胸の思いを解き放つことはできようか。
高邁な志を保つだけの己れを顧みて、上を仰ぎ下に俯して古今の人びとに恥じ入る。

陸機　二六一―三〇三　字は士衡。呉郡（江蘇省蘇州市）の人。三国呉の名門の家に生まれたが、呉は陸機二十歳の時、晋に滅ぼされた。のちに晋に召されて、弟の陸雲とともに都洛陽に赴く。亡国呉の出身者に対する侮蔑や生来の才知に対する嫉妬を受けるなかで、保身と出世を求めてその時々の権力者に就くが、結局、讒言によって処刑された。文学の広いジャンルに作品をのこし、『文選』に採録された五十二首という詩の数は最も多い。楽府にも他を圧する十七首が録されるのは、創作の幅の広さをうかがわせる。

『詩品』上品。

0「猛虎行」は楽府題。遠く旅する人の苦難をうたう。　**1・2**　いかがわしい物には近寄らない潔癖さをいう成語。「盗泉」は李善の引く『尸子』に「孔子　勝母(地名)に至り、暮れたるも宿せず。盗泉(地名)に過り、渇するも飲まず(不)。其の名を悪めばなり」。「悪木」は李善の引く『管子』に「夫れ士は耿介の心(節義心)を懐き、悪木の枝に蔭せず(木陰に入らない)。悪木すら尚お能く之を恥ず。況んや悪人と同に処るをや」。**4**「志士」は我が身を捨てても仁を大切にする人。『論語』衛霊公に「志士仁人は、生を求めて以て仁を害すること無く、身を殺して以て仁を成すこと有り」。「苦心」は心を砕くこと。　**5**「整駕」は馬車の支度をする。「時命」は「時の命」の意味で、王の命令をいう。『尚書』説命上に、殷の高宗(武丁)が傅説に命じて「予が時命を欽め」。　**6**「策」は竹製の細い杖。『荘子』譲王に、周の祖先大王亶父について「筴(策)を杖りて之(邪の地)を去り、民相い連なりて之に従う」。　**7・8**　衣食のためには邪悪なもの、野卑なものであっても、生活をともにせざるを得ない場合があるという。李善が題下に引く「古猛虎行」に「飢うるも猛虎に従いて食らわず、暮るるも野雀に従いて棲らず」。ここではそれを反転して用いて旅の苦難をあらわす。　**9**　一日の時間が過ぎても手柄をあげられないことをいう。「日帰」は日が暮れる。『大戴礼記』誥志に「日は西に帰り、

明を東に起こす」。　**10** 前句が一日の終わりをいうのに続けて、一年が過ぎ去ることをいう。「歳陰」は秋冬になる。　**11**「駭」は勢いさかんに起こる。雲が湧き起こるのは世の不穏な情勢をいうか。　**12** 太平の世には風は五日に一日吹くのみ、それも枝を揺るがすほど強い風は吹かないとして(『論衡』是応など)、「風、条(えだ)を鳴らさず」は成語化している。ここで枝が風で音を立てるのは太平ならざる世であることをあらわす。　**13**「静言」は『詩経』邶風・柏舟の「静かに言(ここ)に之を思う」など、『詩経』によく見られる語。それを借りてここでは「静言」二字で「静言思之」四字の意をあらわす。「幽谷」は人跡稀な深い谷。『詩経』小雅・伐木に、鳥について「幽谷自り出でて、喬木に遷る」。　**14**「長嘯」は声を長く引き延ばして詠唱する。多く隠者の行為。『楚辞』九歎・思古に「深水に臨みて長嘯す」。「岑」は山頂。　**15**「急絃」は絃をせわしく弾く。「儒響」は柔弱な音。　**16**「亮節」は「明瞭な音節」の意味で前の句と対をなしつつ、「堅固な節操」の意味を掛ける。「難為音」は世間一般の音と同調できないこと、俗な音を超越していることをいう。　**17** 魏・王粲「蔡子篤に贈る詩」(巻二三)㊂に「人生は実に難し」。　**18**「曷」は「何」に通じて反語の助字。「云」はそれに添えた助字。「開衿」はわだかまる思いを解き放つ。苦難から逃れられない人生にあって、心は常に重苦しいことをいう。　**19**「眷」はふりかえって見つめる。「耿介」は高邁な精神を抱くこと。

双声の語。『楚辞』九弁に「独り耿介にして随わず、願わくは先聖の遺教を慕わん」。

20「俯仰」は上を見たり下を見たり。「愧古今」は高い志を抱きながらも行動に移せない自分を古今の賢者に対して恥じる。『孟子』尽心上の「仰ぎて天に愧じず、俯して人に怍じず」を反転して用いる。　○押韻　陰・心・尋・林・陰・吟・岑・音・衿・今

陸機の楽府は十七首も採られている。その特徴は、歌謡的な民間の楽府から離れ、士大夫の生き方についての思弁を盛り込むところにある。

本詩は安逸に逃げ込まず、精神を高く掲げて生きることとその苦難を、旅人に託してうたう。君命を受けて遠い地へ向けて旅立つという設定は、大いなる使命を自覚した生き方の隠喩か。食べる物、泊まる場所にも苦を厭うことなく、ただ時間がせまり何も成し遂げられないことに焦燥する。生活や金銭に流されず、精神の矜持を保つことこそ、志士の姿。模範とするのは歴史のなかの人物。それと比べながら厳しく自分を律する。

君子行

1 天道夷且簡　　天道は夷らかにして且つ簡たり

2 人道嶮而難
3 休咎相乗躡
4 翻覆若波瀾
5 去疾苦不遠
6 疑似實生患
7 近火固宜熱
8 履冰豈惡寒
9 掇蜂滅天道
10 拾塵惑孔顔
11 逐臣尚何有
12 棄友焉足歎
13 福鍾恆有兆
14 禍集非無端
15 天損未易辭
16 人益猶可懽

人道は嶮しくして難し
休咎　相い乗躡し
翻覆すること波瀾の若し
疾しきを去るは遠からざるに苦しみ
疑似は実に患いを生ず
火に近づけば固より宜しく熱かるべく
氷を履めば豈に寒きを悪まんや
蜂を掇りて天道を滅ぼし
塵を拾いて孔顔を惑わす
逐臣も尚お何か有らん
棄友も焉くんぞ歎くに足らん
福の鍾まるは恒に兆し有り
禍の集まるも端無きに非ず
天損は未だ辞するに易からず
人益は猶お懽ぶべし

17 朗鑑豈遠假　朗鑑　豈に遠く仮らんや
18 取之在傾冠　之を取るは傾冠に在り
19 近情苦自信　近情は苦だ自ら信ず
20 君子防未然　君子は未然に防ぐ

君子行

天のありかたは平らかで簡素なもの。人のありかたは険しく困難なもの。
禍と福とが代わる代わるかぶさって来て、反転するさまはまるで大波のよう。
悪事を払おうにも遠くには棄てられず、正邪まぎらわしい事はまことに煩わしい。
火に近づけば熱いのは当たり前。氷を踏めば冷たいのはわかりきったこと。
蜂をつまんだために親子の自然の縁も切れ、塵を拾い上げたことで孔子と顔回の師弟の間にひびが入る。
君主に放逐されても何ら悲しむことはなく、友人に棄てられても嘆くことではない。
福禄が到来するのにはいつも徴候があり、災禍の集来にも端緒がないわけではない。
天のもたらす損害は避けがたいもの、人のもたらす利益はそのまま喜べばよい。
手本となる鏡は遠くに求めずともよい。鏡を手に取れば冠が傾いているのは明らか。

小人は目先のことにとらわれて信じてしまうが、君子は事の起こる前に防ぐもの。

0「君子行」は楽府題。　**1・2**「夷」は平坦、「嶮」は険阻。「天道」は自然であるゆえに本来シンプルなものであるが、それに対して「人道」は複雑で難儀が多いという。『荘子』在宥に「天道有り、人道有り。無為にして尊き者は、天道なり。有為にして累わしき者は、人道なり」。　**3**「休」はさいわい、「咎」は災い。『尚書』洪範に、天が人にくだす「庶徴（さまざまな徴候）」のなかで、気候・天候が正常なのが「休徴」、異常なのが「咎徴」、それは君主しだいであるという。ただしここでは天の与える禍福よりも、人間関係における幸不幸を指す。「乗躡」は前の物の上に後の物が乗り上げる。「躡」は踏む。　**4**「翻覆」はひっくり返るさま。双声の語。　**5** 悪い事を遠ざけようとしても遠くに棄てられないのが困る、の意。『左伝』哀公元年、伍子胥が呉王夫差を諫めた言葉に「徳を樹つるは滋きに如くは莫く、疾しきを去るは尽くすに如くは莫し」。「疾」は悪。　**6** 悪かどうかはっきりしないのがさらに困る。『呂氏春秋』慎行論・疑似に「人をして大いに迷惑せしむる者は、必ず物の相い似たる者なり。玉人（玉の研磨工）の患うる所は、石の玉に似たる者を患う」。　**7・8** 火に近づけば熱く、氷を踏めば冷たいのは当然。『論衡』寒温に「夫れ水に近づけば則ち寒く、火に近づけば則ち温かなり」。「履氷」は『詩経』小雅・小宛の「薄氷を履むが如し」を用いる。　**9・10** 親子